

りんどうが繋ぐ縁

平成21年より栽培が始まって、わずか2年で約1,000万の販売高を記録し、今後大きく成長が期待されている『白神りんどう』。栽培する荒川忠良さん・民子さん夫妻は、初年度からりんどうを手掛け、現在60aを営んでいます。

「藤里町役場の勧めで、りんどう産地の視察に行ったのが、栽培を始めたきっかけです。当初は何も分からず手探り状態でしたが、JA営農指導員や行政の支援などのおかげで、収量や



品質を向上させることが出来ました。それと研修などを通して、様々な方と知り合えたことも、貴重な財産となりましたね。」

新たな特産品として…

お盆や彼岸などでよく使われるりんどうは、7月から9月にかけて出荷時期を迎えます。藤里産のりんどうは市場評価が高く、他産地に比べて花の色が鮮やかなのが特徴です。

「栽培では病害虫の防除に心がけ、葉枯れ病などが広まらないよう、毎日チェックを欠かしません。また定植の畝間を多く取ることで、肥料農薬の施用や収穫などの作業効率化も目指しています。りんどうは多くの品種があります。りんどうは多くの品種がありますので、新しい品種にも挑戦し、圃場に適した栽培に向けて日々勉強中です。」と荒川さん。

来年は若い世代の栽培農家も加わり、全体の栽培面積も2haとなる『白神りんどう』に対し、荒川さんは「生産者数の増加や品質の維持・向上を、地域一体で取り組み、藤里町の新たな特産品としてPRしていきたい。」と意気込みを力強く語ってくれました。

農産物の豆知識



りんどう ～心と身体を癒してくれる万能花

りんどうはリンドウ科の多年草で、高さが30～80センチになり、根茎は淡黄色で少し肥大して長くのび、多数のひげ状の根をつけ、根はかむと強い苦味があります。お盆や彼岸の仏花として人気の切り花で、最近ではピンクや水色、白色などの多彩な花色の生産も広がり、仏花以外にも需要も増えています。主に6月下旬から11月上旬まで出荷されており、敬老の日に贈られる人も多い花です。

9月の誕生花のりんどうは、群生せず一本ずつ咲く姿と、「紫」のイメージなどから「悲しんでいるあなたを愛

する」という花言葉があります。

その美しい姿で見る人の心を和ませてくれるりんどうは、別名『竜胆』とも言われ、中国や日本において古くから漢方薬としても利用されています。

使われるのはりんどうの茎や根で、そこに含まれる苦味配糖体のゲンチオピクロシドおよび黄色色素ゲンチジンなどの成分が、健胃作用・消炎作用、解熱作用があり、苦味健胃薬として消化器の充血や炎症、リウマチなどに良いとされています。



△色鮮やかな紫色がたいへん美しいりんどう

リンドウの効能(一部)	
胃酸過多	下痢
消化不良	食欲不振
冷え症	回虫駆除
下痢	胃アトニー
健忘症	寝汗

